

## 青少年の『非行』化傾向について

中川 晃

### 一、はじめに

最近、中学生・高校生による犯罪・非行が増加し、いわゆる犯罪のローティン化（低年齢化）が現出している。

経済不況による会社倒産↓失業↓借金苦によって家庭が崩壊し一家離散や一家心中の記事が新聞の社会面ににぎわしている半面、学校教育の現場では、低学力から非行化する中学生・高校生の集団的な暴力事件や女子中・高生による売春行為などが問題となってきた。

このような青少年の非行化問題を自分なりに①青少

年の置かれている現状はどうか。②中産階級の子どもの「非行問題」はどうして増加しているか。③青少年の「非行問題」を研究するにあたり、どのような犯罪理論があるのか。青少年非行が犯罪理論の中どのように位置付けられ、とらえられているのか。という3点の問題意識にそって以下論述していきたい。

### 1 少年が置かれている状況

両親はそろっているが、母親が母親たる役割を果たしていず、子供の世話をしきれない家庭において、子供は母親を尊敬せず、家庭から逃げて友達の家に泊ったり万引き・シンナー遊びをして、自分をこまかさざるをえなくしているケース。両親がギャンブルをし

て一日中家をあけて、子供のことをかえり見ない家庭で、子供は親にかまってもらえないさみしさを、同じ境遇にある同級の者や年上の者ときあい・シンナー遊び・喫煙・万引きなどをして、警察に補導されるケース。

学校に行っても、クラスの友達から仲間はずれにされたり、先生から無視されたりして学校を休み盛り場に入りし非行グループに交わって警察に補導されたケース。これらはいづれも、ごく一部を除き生活保護家庭で経済的に困窮している家庭の子供が多い。子供は、マスコミの物質的欲望をあおりたてる宣伝の影響を受け、目の前に欲望をちらつかされると非合法の手段をとるようになるといえる。

## 2 社会心理学的に「少年非行」を説明する。

（子供はフラストレーションの解消の為に非行を行なっている。）

学力尊重の社会では低学力のために、クラスの仲間や先生に認めてもらえないからスポーツその他を通じて「男らしさ」・「たくましさ」を誇示して自分を社

会に認めさせて生きていかざるをえないという考え方に左右される。子供は誰でも、自分を認めてほしいという欲求をもっている。その欲求が疎外されると、なんらかの方法で自分を認めさせようとする。

家の中がおもしろくない、たとえば、親が自分を放任してかまってくれず、学校へ行っても、低学力のために学校の授業についてゆけない。だから学級の中で、力の弱い子とかに対して暴力をもって使えばしりを、させたりして自分を認めさせたりする。

3 中産階級の少年非行と下層階級の少年非行が同じ原因において説明されるかどうか。

都市病理学（有斐閣双書）第8講・都市の逸脱集団、非行副次文化（岩井弘融氏）の文で「……下層階級の特定の文化面の反映はスラムの住民などに見られる頑強さ、他人をたぶらかす鋭敏な能力・危険な生活を送ることに満足を抱く昂奮、運に対する信仰・外的な束縛をいやがる性質・浮浪癖・慢性的な紛争などである……」と記されている文は、下層階級の人々はまじめ

で勤勉で、常に子供のことを思つてよく働らき、温和で親切な人々が多いという事実に対し、きわめて差別的でおごりたかぶつた表現で、下層階級の人々を愚ろうしていると思う。そして、「……中産階級の価値

観は、責任倫理の強調・技能や業績の涵養に高い価値をおくこと、野心を美德とすること、直接的満足をおぼして、長い目標をおくこと、計画・見通し・予算などの合理性やマナー・礼儀・人柄などの重視・物理的攻撃や暴力のコントロール・健全なレクリエーション・財産尊重・清潔などが重くみられる。」という文を続けて記して書かれているということは、中産階級の価値観を記すことによつて下層階級の価値観を低位なものと見て表現している。しかし、はたして中産階級の価値観として列記した内容と下層階級の価値観とがまったく違うものであるとは思えない。

岩井弘融氏は、下層階級を差別視していると思う。

非行がなぜ下層階級に多いのかということについて述べると中産階級の価値観つまり「よい仕事につきたい」「きれいな家に住みたい」という同じような価値観を受けいれているにもかかわらず・目的を達成する

手段すなわち安定した仕事と収入に欠けている。

学歴がないが故に地位の上昇がない。そういう目標を達成するような手段が下層階級の人たちにはきわめて制限されている。したがって、それを達成するために非合法の手段をとらざるをえない状況・社会的に認められている価値とは別の価値を追い求めざるをえないように追い込まれている。ギャンブルにおぼれたら、暴力団に入つて肩で風をきる人間になつたりして、せつな的に欲望をまぎらわせている一部の人はいるが大半の人々はまじめに働いている。

#### 4 中産階級の非行は増えている

（物質的に恵まれているにもかかわらず、万引きやその他非行を重ねているのはなぜなのか。）

「有名校」への進学のため、朝から晩まで勉強している子供は親や親せきから「兄弟やいとこが、有名校へ進学したから君も進学しなさい」とか「友だちが『有名校』目指して勉強しているからそれに負けずに勉強せよ」とかいつて親やまわりから期待と重荷を背

負わされている。この結果、子供は友達が減り「遊び」すら忘れてしまったりして子供らしさを失いになっている。子供は親やまわりからの期待と重荷にたえかねて、目に見えないところで非行をしている。

高度に経済が発展して物が豊かになると、「金もうけが何より大事だ。」「お金さえあればなんでもできる。」といった考え方が人々の頭をおおい、ギャングル文化が生まれてきた。親は子供に物さえあたえればよいと思い、金をやることが親の愛情のかわりだと考えている。家庭が経済的に安定していても、親のどちらかが性的に墮落していたら子供はその親に対して嫌悪感を抱き、非行グループと近づいて非行行動をおこなっているケースがある。

## 5 引用資料から

「犯罪の原因」E H・サザランド・D R・クレッシン  
イー・高沢幸子・所一彦訳（有信堂刊）の第3章犯罪  
学の概観と方法の中の類型学派について述べている中  
のロンブローゾ学派（イタリア人ロンブローゾを指導

者とする学派）が主張している「犯罪者は生まれつき  
特異な拘型である。この類型は左右不均等な頭蓋骨、  
長い下顎、平たい鼻、まばらな顎ひげ、痛覚の鈍麻等  
の特徴ないし異常によって判別できる。そのような特  
徴が五個を超える者は明白な犯罪人類型であり、三個  
ないし五個の者は不完全ながらそうであり三個未満の  
者は必ずしもそうだとはいえない。とする説がある。

しかし、はたして犯罪者が生まれつき特異な類型で  
あるとか左右不均等な頭蓋骨・長い下顎・平たい鼻・  
まばらな顎ひげ・痛覚の鈍麻等の特徴ないし異常によ  
って判別できるのであるか。この説は犯罪を説明す  
るにはあまりにも信憑性に乏しく思う。なぜなら、こ  
の説を証明するに必要な統計学的資料が存在しないし、  
生まれながらに一個の人間が身体的特徴によって「犯  
罪をおこす人」であると決めつける考え方に反対であ  
る。

同じく第3章の同じ類型学派の智能測定学派（メン  
デルの法則に従って遺伝される精神薄弱が犯罪の原因  
だとするゴッダードの理論に代表される学派）の「精  
神薄弱者は行為の結果を評価しえず法の意味を理解し

えない。殆んどすべての犯罪者が精神薄弱者である。」  
という説は精神薄弱者総体が物事の行為をその結果出  
てくる物事の良し悪しの判断なしで物事を行ない犯罪  
者総体がすべて精神薄弱者であるといっている。

この説は個人がなぜ精神薄弱の傾向におちいったの  
か。その原因を分析し精神薄弱の傾向克服の道すじを  
述べていない。この説は「精神薄弱者」に対する悪意  
に満ちたものだと思う。

同じく第3章の犯罪学の概観と方法の中の社会学派  
および社会心理学派（フォン・リスト・ハドイツ・ブリ  
ンス・ハベルギー・フォン・ハメル・オランダ・ヴォイ  
ンツキー・ハロシヤ・Vなどの主張する犯罪総体を社会環  
境の作用によるものと理解する学派）の「犯罪原因に  
おける『模倣』の重要性を強調し、人はその社会の習  
慣に従って行動する。すなわち人が盗んだり殺したり  
するのは、単に他の人を真似しているにすぎない。犯  
罪行動は他の社会行動と同一の過程から生ずる（社会  
学派の中心命題）・過程の分析は第一に犯罪率の差異  
を全社会的な体制の差異を含む意味での社会組織の差  
異と関連させようと試みた。」という説は犯罪が社会

構造の中の社会関係による相互作用によって生まれる  
ということを経験的な資料によって明らかにしようと  
したものである。

第4章犯罪行動の社会学的理論の中の犯罪学の理論  
にとっての問題の項目の中の「調査研究によれば、犯  
罪行動は貧困・悪い住宅条件・スラム・リクリエーシ  
ョン設備の欠如・不適當・不道德な家庭・精神薄弱・  
情動不安定・その他の特徴ないし条件といった社会的  
個人的病理と多かれ少なかれ関係を持っている。」と  
いう説は犯罪行動説明における集大成だと思う。

第5章犯罪非行と社会過程の中の規範抗争の展開と  
いう項目の中のクラワードとオーリンの主張の中で  
「際限のない欲求とその達成を制限する社会構造との  
間の衝突に対する反応として、少くとも三つの異なっ  
た型の非行的副次文化が創出されている。」という説  
は、成功目標に対して不法な通路を開き、窃盗・ゆす  
り・詐欺などの方法で物質的利益を追求するのをよし  
とするような規則をもつ「犯罪の副次文化」であり、  
他の一つは物理的な力を使い、あるいは、その脅威を  
使うことによって地位を獲得するのをよしとする規則

を持つ「鬭争的副次文化」である。残りの一つは、麻薬の使用をよしとする規則を持つ「退嬰的副次文化」であると説明している。

第10章家庭と家族の中の一般的過程の項目の中で、家庭条件と非行との関係の分析の結果、五つの原則的な過程が現われるとし第一に子供は家庭内で親や他の親族を観察することによって非行的な態度や掟や行動型に同化することがある。第二に親は一般社会における家庭の地理的・社会階級的位置を決定する。

第三に家庭は種々の人物を評価してその信望を決定し、また後に親しくなる人物の型を決定することがある。第四に子供は不快な経験や状況によって家庭から追われたり愉快な目を見ないからというので家から飛び出すことがある。第五に家庭は尊法的なやり方で社会生活関係を処理するように子供を訓練していないことがある。この五つの原則的な過程は、家庭（家族集団）が所属している地域社会の中におかれている社会的・経済的な状況が少くなくならず影響をもっていると思う。

今まで見てきた学説は犯罪・非行を社会学的に解明

するため、さまざまな角度から考察を加え分析をしていると思う。しかし、犯罪・非行に対する世間の一般の認識は単に犯罪・非行を、それを起こす個人の問題としてとらえられ個人が何かの身体的な特徴をもっていたり、精神的に社会に適応できない面などを取り上げそのことが犯罪・非行をなした原因であるとする考え方とか、経済的・社会的に圧迫され差別されてきた被差別部落を指して「あそこの者なら、何をしてくすかわからない。」という、まるで被差別部落が悪の温床であるかのごとき被差別部落を露骨に差別する意識が存在していたり、在日朝鮮人民・沖縄県民・アイヌ人民等に対しても被差別部落と同様の差別意識が存在している。こういう現状の中で差別意識をつくり出す日本の政治的・経済的・社会的構造とそして、そこから出るマスコミ（新聞・ラジオ・テレビ等）を通じての差別意識の洪水、それをまともに受ける人民が引き起こす差別現象といった差別の悪循環をたちきるための社会学的立場からの研究を深め実践しなければならなと思った。

# 暴走族集団及び構成員数

(昭和50年6月18日現在)

6 青少年の「非行」の実態・警察統計から

管 区	集 団 数	構 成 員			
		総 数	うち少年数	少 年 の 占める率	未 把 握 推 定 構 成 員
北海道	( 4 0 )	( 148 0 )	( 94 0 )	63.5%	0
東 北	( 68 108 )	( 698 341 )	( 352 273 )	50.4% (80.0%)	976
警視庁	( 64 68 )	( 1,768 3,871 )	( 1,582 3,474 )	89.9% (89.7%)	5,700
関 東	( 579 466 )	( 4,091 6,153 )	( 3,269 4,435 )	79.9% (49.2%)	12,974
中 部	( 83 69 )	( 721 457 )	( 411 225 )	57.0% (82.8%)	1,889
近 畿	( 110 87 )	( 688 657 )	( 514 544 )	74.7% (82.8%)	936
中 国	( 21 31 )	( 0 35 )	( 0 35 )	0 (100%)	308
四 国	( 0 )	( 46 0 )	( 27 0 )	58.7% ( )	0
九 州	( 106 36 )	( 569 42 )	( 245 21 )	43.0% (50.0%)	60
計	( 1,035 865 )	( 8,729 11,556 )	( 6,501 9,007 )	74.5% (77.9%)	22,843 (10,683)

( )中の数字は昭和49年12月の数である。

(京都府警木津警察署)

## 6 青少年の「非行」の実態・警察統計から

### ○暴走族集団の現況

#### 暴走族集団数及び構成員数

昭和50年6月現在における暴走族集団は、別表のとおり千三十五グループでありこのうち関東地区が五百七十九グループで全体の五十五・九%を占めている。

また構成員は推定三万五千五百七十二に上りこのうち確実に把握している構成員八千七百二十九人について成人・少年の別をみると少年は六千五百一人で全体の七十四・五%と高い割合となっている。そして、少年の中の約五十%を高校生が占めているのが顕著な特徴である。資料を全国的に見ると構成員数・集団数が、関東・近畿に多く中国・四国・東北・北海道に少ないのはなぜか。また少年の占める率が多いのはなぜか。大都市及び大都市周辺部に分布し教育上の問題・差別・選別の教育体制への反発や職場内の人間関係・社会的・経済的に現存する価値等に対する反発・抵抗とスピードを出すことによってせつな的に不満をまぎらわせようとしている。少年の占める率が多いのは学校や家庭の中で何かの問題をかかえていて常に自分が認めても

らえないからオートバイを乗りまわしスピードを出すことによって認めさせようとしたりしている。

### ○シンナー等乱用行為の現況

乱用行為による補導人員は倍増した。昭和50年1月から3月中に補導した乱用少年は六千五百八人でこのうち立件送致した少年は千六百二十三人である。補導人員では高校生・無職少年等が著しい増加をみせている。なお成人の場合も取締人員・立件送致人員ともに大幅に増加している。またシンナー等を乱用して自動車を運転して死傷事故を起こした事案・乱用常習から殺人事件や傷害事件を起こした事案等が発生しているのである。○シンナー年別補導少年数表・年別死者数表をみると昭和四十七年以降から減少しているのはなぜか。警察や地域青少年補導委員会等による補導の強化・塗料店その他のシンナー等の不売・マスコミ・映画等による危険度の宣伝・広報などによって減少傾向にある。



シ ン ナ ー 年 別 補 導 少 年 数

	学 生 ・ 生 徒						
	総 数	中 学 生	高 校 生	そ の 他	計	有職少年	無職少年
43年	20,812	2,084	6,408	441	8,933	6,733	5,146
44年	31,028	2,992	7,837	810	11,639	12,004	7,385
45年	40,045	4,221	10,059	1,092	15,372	16,493	8,180
46年	49,587	5,512	12,382	1,352	19,878	19,878	10,462
47年	36,054	4,334	8,493	1,052	13,878	14,498	7,678
48年	16,220	2,163	3,421	382	5,966	6,989	3,268
49年	21,137	2,625	5,207	548	8,380	8,756	4,001

年 別 死 者 数

	総 数	乱 用 死		計	自 殺		計
		少 年	成 人		少 年	成 人	
43年	110	47	16	63	17	30	47
44年	161	61	23	84	33	44	77
45年	124	53	28	81	23	20	43
46年	113	50	20	70	23	20	43
47年	93	36	17	53	17	23	40
48年	96	58	18	76	9	11	20
49年	84	43	26	69	6	9	15

## 二 おわりに

青少年非行の研究ノートということで、現状・比較・理論の順に不十分ながら論述してきたが、非行問題のとりえ方について様々な視点があるが自分としては、警察官や青少年補導委員会といった立場ではなくて、非行化した青少年の立場にすくなくとも近づいた視点で考察してきたつもりです。

子どもの非行化は、「親や家庭の責任」であるという主張がよくされますが、これは現象だけに気をとられて本質にまで目のとどいていない考え方だと思えます。各家庭が地域社会を構成している以上、そこにはコミュニティ（地域性と共同体感情）が当然あるのですから地域社会が一体となった非行防止の取り組みがなされるのがあたり前のことだと思ふのです。

### （参考文献）

大橋薫・大藪寿一編『都市病理学』昭和48年・有斐閣双書

E・H サザランド・D・R クレッシー 高沢幸子・所

一彦訳『犯罪の原因』昭和49年・有信堂刊

（本学学生）

## △ 会 員 募 集 ▽

当社会学研究会では、社会学に関心をもつ方を学内・学外を問わず広く会員として募集致しておりますのご入会下さるようお願い致します。

なお、会費は年間二、〇〇〇円です。但し、通学課程・通信教育課程の学部学生は、年間一、〇〇〇円です。